

Yamoyden から *Hobomok* へ

Palfrey の書評と「アメリカ的変容」の関係

中村 正廣

チャイルド (Lydia Maria Child) が 22 歳のとき出版した *Hobomok* (1824) と、キング・フィリップ戦争を扱った James Wallis Eastburn と Robert Sands の物語詩 *Yamoyden* (1820) との関係については、これまで幾つかの論考がある。しかし、従来の研究は前者が後者から受けた間接的な影響に固執するあまり、二つの作品に見られる全く異なる歴史観を看過しているように思われる。アメリカ先住民と白人の衝突という視点から見れば、*Yamoyden* から *Hobomok* への先住民の物語の変容は単に女性作家たちの文学の誕生の曙光となったばかりでなく、その非常に「アメリカ的な」視点によって後のアメリカ文学に大きな影響を与えることともなった。以下二つの作品を結びつけた John Gorham Palfrey の *Yamoyden* 書評を手がかりにこの変容の歴史的意義について考察したい。

(1)

Thomas Wentworth Higginson は *Hobomok* と J.G. Palfrey のとの書評との関係について次のように述べている。¹

Dr. J. G. Palfrey had written in the "North American Review" for April, 1821, a review of the now forgotten poem of "Yamoyden," in which he had ably pointed out the use that might be made of early American history for the purposes of fictitious

writing. Miss Francis read this article, at her brother's house, one summer Sunday noon. Before attending the afternoon service, she wrote the first chapter of a novel. It was soon finished, and was published that year, — a thin volume of two hundred pages, without her name, under the title of “Hobomok: a Tale of Early Times. By an American.” (113)

「アメリカの純文学の新時代を画する」(114) *Hobomok* という作品をチャイルドに書かせる契機となったのは *Yamoyden* という作品そのものではなく、アメリカの歴史をアメリカの文学作品にいかに取り込むかについて論じた Palfrey の書評であるという指摘である。さらに Higginson は、先住民を自分の目で見たことのない十九歳の若い女性が書いたこの作品は「十分練れていない」ところがあり、そのプロットは「実に信じがたい」ものの、その「真摯さ」と「郷土色を追究するその誠実さ」に救われているとし(114)、アーヴィングの *The Sketch Book* とクーパーの *Precaution* というわずかな作品しか存在しなかったアメリカ文学に、「初めてピューリタンの時代を描いた作品」(115) を新たに付け加えているという点でこれからも歴史への関心を呼び起こすだろうと述べている。

Carolyn Karcher はこの二つの作品の関係に更なる考察を加え、*Hobomok* が Palfrey の書評と *Yamoyden* から受けた影響について次のように述べている。

Whether in fact *Hobomok* was entirely the fruit of Child's imagination, or owed more than she admitted to the epic poem that had occasioned Palfrey's momentous review, is an open question. The parallels between *Hobomok* and *Yamoyden* extend far beyond the titles that announce the two works'

self-conscious use of native themes. Both describe their Indian title characters as “cast in nature’s noblest mould”; both feature Anglo-American heroines who elope with Indian lovers in defiance of paternal wishes. And both model themselves after Shakespeare’s *Othello* in having their dark-skinned heroes win the love of a white woman through eloquent recitals of their exploits and adventures (*Yamoyden* 124-28; *Hobomok* chs.5, 13, 18). True, Palfrey’s detailed summary of *Yamoyden* could have sufficed to provide Child with the germ of her plot, and the idea of drawing for inspiration on English literature’s most memorable account of an interracial wooing was obvious enough to have occurred to her independently. In any case, if she did literally write the first chapter of *Hobomok* “exactly as it now stands” on the very afternoon that she read Palfrey’s review, she had already conceived the embryo of a plot that differed substantially from *Yamoyden*’s, whatever hints she subsequently derived from directly consulting the poem cited so frequently in her epigraphs. (Karcher, “Introduction” xviii-xix)

Higginson は *Yamoyden* と *Hobomok* の直接的な関係について触れていないが、Karcher は *Hobomok* に使われたエピグラフからチャイルドが *Yamoyden* という作品に直接あたったという事実を明らかにしている。*Hobomok* に登場する *Yamoyden* からの引用は、4 章、13 章、17 章、18 章の計四つのエピグラフだが、Karcher はそれらのエピグラフが *Yamoyden* のどの部分から引用されたものか特定しておらず、そのエピグラフにそれほど大きな意味を見出していない。*Hobomok* においてチャイルドがエピグラフとして引用した *Yamoyden* の詩行を調べてみると、第

一篇第十五スタンザ、第三篇第十スタンザ、同第十九スタンザ、同第二十九スタンザの四箇所であることがわかる。第一篇の第十五スタンザはアメリカ先住民の戦士集団の「不滅の誇り」とその「優美に聳え立つ姿」を賛美した詩行であり、第三篇の第十スタンザは、キリスト教徒である白人植民者たちの「天への強い愛」と「強大な」神の力の賛美を描いている。三つ目の第三篇第十九スタンザは植民者の中の一人の老人の「悲しく孤独なままの魂」、即ち、Yamoyden の妻となる英国人女性 Nora の父 Fitzgerald が語る「苦難の物語」の導入部分である。最後の第三篇第二十九スタンザはその悲しい物語が「地獄に落ちる罪」を犯した娘 Nora にかかわることが明らかにされている。実はこの四つのエピソードこそ、チャイルドが Yamoyden をいかなる形で自分の物語に語り直そうとしたのか、つまり彼女の真の意図を明らかにするのに重要な意味を持つ。

Karcher は更に考察を続け、次のように女性の文学の視点から論を展開する。進歩的思想を持っていた Eastburn と Sands は先住民問題に多大な関心を抱いていたが、Hobomok 執筆当時のチャイルドは、1828 年出版の *The First Settlers of New-England* でアメリカ政府の先住民政策を批判したときの彼女とは違い、先住民問題にさほど大きな関心を抱いてはいなかった。² Eastburn と Sands の二人がクーパーと同じように異民族間の戦争に焦点を当てながら、その物語を「家父長制の権威の再主張」(xix) に終わらせたことにチャイルドの目は向けられた。つまり、Nora が捕えられて彼女の父親に引き渡され、その後父に許され、そして Yamoyden が彼女の父を他の先住民の攻撃から救おうとして命を落とすというプロットと、それに続く二人の死と二つの民族の衝突の悲劇的な結末は、結局のところ「白人優越主義と家父長制の権威を脅かすもの」を Eastburn と Sands が拒否しているのであり、チャイルドはそこに女性文学の主題を見つけたのだと Karcher は解釈している (xix-xx)。

Palfrey の *Yamoyden* 書評は 23 頁にわたる大部のものでありながら、実は *Yamoyden* のプロットに関する説明及び分析、批評は 14 頁（そのほとんどが分析批評というよりも引用の羅列である）のみで、チャイルドがエピグラフで挙げた詩行に関しても全く関心を見せず、引用も説明もしていない。つまり、Nora が *Yamoyden* に抱く愛情と、二人の愛を前にした彼女の父 Fitzgerald の苦悩には彼の書評は全く触れていない。しかし、Palfrey の批評に影響を受け、彼の批評を読んだ直後にチャイルドが *Hobomok* を書き始め、第一章を書き終えたのであれば、恐らくチャイルドが最も興味を抱き、そして実際に *Yamoyden* を読んだ後も大きな変更を加えることがなかったものが Palfrey の批評の中にあつたことは想像に難くない。*Hobomok* の第一章には作品の基調となるピューリタン社会の描写、Roger Conant, Mary Conant, Charles Brown, Hobomok など主だった登場人物がすべて登場し、英国とアメリカ植民地の文化の対比も明確に描写されている。先住民の不穏な動きと絡めたピューリタン社会内部の宗派の対立と社会の分裂の危機が、*Hobomok* の大部分の描写を占めている事実を勘案すると、チャイルドが特に大きな関心を抱いたのは、Palfrey の批評の結論部分にある *Yamoyden* のテーマの扱い方への批判とピューリタン社会の成立についての正当化であったと言える。これこそが彼女に *Hobomok* を書かせた最大の要因であり、彼女が *Hobomok* というタイトルをこの小説に与えながら、そのほとんどをピューリタン社会の描写に費やし、*Hobomok* 自身よりも Mary Conant と Charles Brown に関心を寄せているのもこれが原因している。そして、それは彼女の関心を異人種混交と白人と先住民の対立という歴史的問題から父権社会の中の女性の生の問題へ大きく転換させたといえる。Karcher が言うところの「*Yamoyden* とは本質的に異なるところのプロット」は、実は異人種混交と先住民問題という歴史的素材を家庭の中に持ち込むことで、バルトが言うところの「脱歴史化」(“privation of history”) と「同一化」

(“identification,” Barthes 29) の両方を行い、アメリカ純文学の幕開きを告げることとなった。

(2)

Hobomok 執筆の刺激剤となった *Yamoyden* は Higginson の生きた 20 世紀初頭から一世紀経った現在でも米国内外の米文学研究者の間でほとんど注目されない作品である。例外的にこの作品にかなりの頁を割いて分析批評を行っているのは John P. McWilliams, Jr. と Gordon M. Sayre ぐらいなので、³ 両者を比較検討する前に *Yamoyden* に対する当時の批評、そしてこの作品のプロットと作者について簡単に紹介しておきたい。

John Gorham Palfrey 以外の当時の批評として以下の三つがある。

There is a very beautiful Proem in this work, in which the Editor gives vent to his attachment for his friend, and dwells on the recollections of their infancy. It is written in the Spenserian measure, and distinguished by uncommon classical purity and elegance. Byron, misanthrope as he is, would not be ashamed of it, and Scott would hug the author to his breast with a manly sympathy. (*New England Galaxy*, 11 May 1821: 121).

It is a complete and consistent poem. It aims at dressing some of the facts of our early history, in the bright robes of poetical fiction. “A mixture of a lie (says Lord Bacon — meaning a lie of poetical invention) doth ever add pleasure.” And those who have attempted, with any decree of Success, to give a romantic interest to the matter of fact occurrences of our national history, deserve well of all who love to pause upon the striking features of

the annals of their country; or who have at heart the advancement of its character in the intellectual world. (Gardner 68)

Although the name of the poem entitles Yamoyden to be regarded as the hero of the story, it is very questionable whether the merits of this claim might not be fairly asserted in favour of King Philip. Yamoyden, however, was a warrior, a lover, and almost a Christian; and as piety, valour and love are always considered very essential ingredients in the composition of an epic hero, he must be permitted to enjoy this preeminence. (*Port Folio*, 1820, qtd. in McWilliams, 134)

最初の批評は「非凡な古典的な統一性と気品」のあるこの作品にはバイロンやスコットでもためらうほどのものがあるとし、二つ目の批評の冒頭で「知性という無形の世界においても不変のものはありません、毎日の経験が露にする絶え間ない感情の変動と対当は、個人が個々の検討すべき問題に関して決定票を投じる有益な特権を個人に与えるものである」(Gardner 51) とする評者は、歴史的イベントについて思案を重ねることの重要性をこの作品の登場に見ている。最後の批評は *Yamoyden* を主人公とすることがキング・フィリップに有利に働くかどうか疑問だと論じつつも、キリスト教徒である彼の敬虔さ、武勇、愛情は叙事詩の主人公としてふさわしいとしている。Palfrey の書評と違い、これらの書評には *Yamoyden* の歴史的視点に関する疑義や異人種混交への批判は見られない。

Yamoyden というテキストには本文の物語詩の他に莫大な数の注がつけられている。ピューリタンの末裔が記した歴史書のみならず、先住民に関して欧米の作家たちが残した多くの資料を Eastburn と Sands の二人

が涉猟したことを物語っている。序文の「広告」の中で、二人はキング・フィリップ戦争という主題に「無知であった」が故に William Hubbard の書いた物語の数頁に急いで目を走らせることから始めたことを Sands は披瀝しているが、彼らが引用した文献は William Hubbard の *A Narrative of the Indian Wars in New-England* や *A Narrative of the Troubles with the Indians in New-England*、また Cotton Mather の *Magnalia Christi Americana*、Increase Mather の *A Brief History of the War with the Indians in New-England*、Thomas Hutchinson の *History of Massachusetts*、Benjamin Church の *Entertaining History of King Philip's War*、Benjamin Trumbull の *History of Connecticut* といったニューイングランドの歴史書にとどまらず、John G. Heckewelder、Pierre François Xavier de Charlevoix、Baron de La Hontan など広範囲に及び、その中で十把一絡げに扱われる先住民の各部族の違いと文化に拘り、また「学識ある、しかし狡猾な年代史家」(Yamoyden 267) の Cotton Mather には Abiel Holmes の *American Annals* をぶつけ、その比較対照によって Mather の Metacom への辛辣な批判を和らげ、Metacom の「亡霊の怒り」(Yamoyden 269) を少しでも静めようとする姿勢が顕著である。

さて、*Yamoyden* の作者の一人 James Wallis Eastburn (1797-1819) はロンドン生まれのアメリカ人で、1803 年に家族とともに米国へ渡った。古典語の教師 Malcolm Campbell やダブリン大学出身の Edmund D. Barry 師に薫陶を受けた彼は Union College を経てコロンビア大学に入学、ニューヨークの St. George's で堅信礼を受けているが、彼が真にキリスト教に目覚めたのは、卒業後の 1816 年ロードアイランド州プリストルで米国聖公会主教の Alexander Viets Griswold の指導の下神学の勉強を始めたときで、その後 1818 年ニューヨークの Trinity Church で執事の職についた彼はヴァージニア州アコマック郡の St. George's の教区牧師となり、教会の仕事に専念、過労のため 1819 年その短い生涯を閉じた。18 歳

で美しい三位一体の主日の賛美歌を書いたこともある彼は、ヴァージニア滞在中にも調和に満ちた自然の中の瞑想について詠った詩 “The Summer Midnight” を書いて *New York Commercial Advertiser* に発表している (Sprague 634-39)。

Eastburn の死後この物語詩を完成させ出版した Robert Charles Sands (1799-1832) はニューヨーク生まれのニッカーボッカー派の作家で、コロンビア大学で二歳年上の Eastburn と知り合い、在学中 Eastburn とともに *Moralist* や *Academic Recreations* を編集、大学卒業後 David B. Ogden の法律事務所で法律を学び 1820 年に法曹界入りするが、その後も法曹界よりも文学に多大な関心を寄せた彼は、*Atlantic Monthly* や *Commercial Advertiser* などの雑誌や新聞の編集に携わり、ブライアント (William Cullen Bryant) とともに *New York Review and Athenaeum Magazine* (1825-26) を編集している。この二つの雑誌の精神を受け継いで Sands が Gulian Crommelin Verplanck やブライアントとともに 1828 年に始めた *Talisman* は主に Sands の努力の賜物で 1830 年まで続き、隨筆、物語、詩からなる三巻の年鑑となったが、ブライアントの作品がかなりの部分を占めた (Taft 225-26; July 105-19; Thompson 60)。

1816 年グリズワルド尊師のところで神学を続けるためにロードアイランド州ブリストルに赴いた Eastburn は、このとき同地の先住民の英雄 Metacom を主題にした物語詩を書くことを思い立ち、翌年彼がニューヨークを訪れたとき Sands との共同執筆について話し合う。こうして始められた物語詩は Eastburn の死後 Sands が書き加えた部分もあるが、後者の言によればほぼ前者が当初考えていた通りの形で出版される。以上のことは *Yamoyden* の「広告」で詳しく述べられている。しかしながら、注がほとんど Sands の手によるものであることから、Eastburn が追究したものを彼が多く資料で補足説明しようとしたことは明らかである。

それでは *Yamoyden* とはいかなるストーリーを持つ作品なのか。*Hobomok* との対比のために少し詳しく述べておきたい。物語は白人植民者との戦いに敗れた *Metacom* が *Mount Haup* に逃げ、最後の復讐の戦いを誓うところから始まる。多くの仲間や長を失った悲しみと白人による不当な仕打ちや不正に触れつつ、戦意を喪失した部下の士気を高めようとするが、モヒガン族の一員でありながら *Metacom* と一緒に闘ってきた *Agamoun* がこのとき関の声に参加しないのを見つけ、厳しく聞いたですと、*Agamoun* は白人に降伏するしか生き残る道はないと主張する。これに激怒した *Metacom* は彼を処刑する。この処刑に反対したもう一人のモヒガン族の *Ahauton* は結局 *Metacom* の命に従うが、心の中で *Agamoun* の復讐を誓う。*Metacom* は部族の結集を図るため、彼の主義に賛同するニブネット族の *Yamoyden* の動向に注目する。この先住民は今回の白人との戦いに参加しているが、白人女性と結婚し、子供を一人もうけている。*Metacom* は家族への愛情を断ち切り、白人を敵として憎悪することができるよう、密かに *Yamoyden* の妻と子供を連れ出すように部下に命じる。*Yamoyden* の妻 *Nora* は子供のとき父 *Fitzgerald* に連れられ英国からアメリカに渡ってきた。*Fitzgerald* はクロムウェルの軍に加わり英国王と戦ったが、あるとき戦場で王党派の敵を倒したとき、それが弟とわかり、また、後に妻が亡くなったことも原因して、英国に嫌気がさしアメリカに渡ったのであった。父子がニューイングランドに移ってしばらくして、二人の小屋に一人の先住民が足繁く通い、*Nora* は彼の話聞くうちに彼を愛するようになる。白人との結婚を迫る父に逆らい、彼女はその *Yamoyden* のもとへ逃げ、彼と結婚、*Yamoyden* の小屋で暮らし、子供が生まれる。*Fitzgerald* は娘の駆け落ちに怒り、娘を勘当する。話変わって、*Nora* とその子供は *Metacom* の命令を受けた彼の部下に連れ去られるが、*Nora* を抱きかかえていたのは *Ahauton* で、白人の集団が海岸で先住民たちを襲ったときに彼女を助ける。しかし、彼女の子供は連れ去られてしまう。

Nora は白人のところへ連れて行かれ、父 Fitzgerald と再会、彼は娘を許し、他の白人に彼女を託して、白人の軍と一緒に先住民攻撃に加わる。一方、Nora は子供と夫のことが脳裏から離れず、Ahauton に頼み込んで Metacom が立てこもる Mount Haup に向かう。最後の先住民と白人の戦闘場面で、Nora は Metacom が Ahauton に殺されるのを見る。次に父 Fitzgerald に振りかざされた他の先住民のトマホークが、Fitzgerald を救おうとした Yamoyden に振り下ろされるのを見た Nora は夫のところへ駆け寄る。Fitzgerald が見つめる中死にゆく Yamoyden を抱きしめる Nora であったが、二人は一緒に息を引き取る。二人が死ぬ前に Fitzgerald は二人の子供は自分が助けたこと、自分が育てることを二人に伝える。

以上が物語の概略だが、Palfrey の批評は第一篇から第六篇まで多くのスタンザを引用しつつ物語の流れが読者に理解できるように配慮はしている。そして、詩の中で取り扱われている事件がこの長編詩にとって不十分なものであるばかりか「芸術的に配置されていない」(477) という欠陥はあるが、「概して正確で説得力があり詩的である」(477) とそれなりの評価は与えている。しかし、彼は先住民と白人との対立・衝突についての描写、及び Yamoyden と Nora の愛、Fitzgerald の苦悩に関する引用と分析は意図的に避けつつ作品の説明を行い、書評の結論部分で多くの紙面を割いてこの作品とニューイングランドの歴史との関係について次のように述べている。

We are gratified with the appearance of Yamoyden, for a reason distinct from that of its being an accession to the amount of good poetry. We are glad that somebody has at last found out the unequalled fitness of our early history for the purposes of a work of fiction. For ourselves, we know not the country or age which has such capacities in this view as N. England in its early

day; nor do we suppose it easy to imagine any element of the sublime, the wonderful, the picturesque and the pathetic, which is not to be found here by him who shall hold the witch-hazel wand that can trace it. . . . The men who stayed by their comfortable homes to quarrel with the church and behold the king, were but an inferior race to those more indignant if not more aggrieved, who left behind them all that belongs to the recollections of infancy and the fortunes of maturer life,--institutions which they revered, and every association that clings to the names of home and country, to lay the foundations of a religious community in a region then far less known to them than the North Western Coast of our continent is now to us. . . . (480)

引用の冒頭で *Yamoyden* の詩的特性がアメリカの初期の歴史を扱ったことにあるとする Palfrey は、それはニューイングランドの歴史にこそ求められるべきものであり、アメリカを築き上げた精神は英国を捨てて新大陸に植民したピューリタンたちのそれであるとする。*Yamoyden* の注にあたかも例を挙げて反駁するかのように、彼はニューイングランドの歴史における著名人 (Winthrop, Mrs. Hutchinson, Underhill といった有名な歴史上の人物のみならず、*Hobomok* にも登場する *Arabella Johnson*、*Thomas Morton*、*William Blaxton*、*Earl Rivers* にまで言及している) の名を挙げて、彼らとその宗教的情熱故にいか「様々な性格を持った者たち」を一つにまとめ、いかに「力強く社会を発展」(481)させたかを論じている。

Palfrey によれば、植民者が完全に悪者で先住民が完全に正しいと捉えるやり方は「歴史的見地」からすれば正しいが、「詩的」(485) に見れば

間違っている。Eastburn と Sands が先住民に寄せる同情は「詩的許容」(“poetical rules,” 485)の範囲内にあるものではあるが、二人が注においてもその姿勢に拘るならばその議論は一般には通用しないと彼は強く主張する。

Politically speaking, Philip had perhaps a right to attempt to rid the country of his English neighbours; but, politically speaking, they had an equal right to keep their ground, if they could. Philip may be suffered to pass for a hero. That he was brave, ambitious, and cunning, is certain. That he was generous, does not appear. As to the merits of his cause, it is for the most part the simplest of occupations to discuss the question of the right or wrong of any war, certainly of a war made by a savage; but if he is to be brought off triumphant in *foro conscientiae*, a court which it is not likely he ever thought of, it must be on the ground of his prophetic conviction of the necessity of guarding against the course of events, and not by the plea of injury sustained from any specific encroachment. . . . With Philip himself the war was neither wantonly nor willingly engaged in. They were a long time apprized of his plots against them, before they were willing to take a hostile step, and persisted in their forbearance till longer forbearance would have been more than extreme temerity. (486)

この引用においてキング・フィリップ戦争中に白人が取った行動は歴史の流れの必然の結果であるとされる。「政治的に」見れば、両者が自分の立場に従い、自らの土地を守り、もしくは相手を排除する権利はあるが、し

かし、戦争の是非や大義といった問題は先住民の場合考慮すべきことではなく、万が一先住民が「良心の裁きの前で」勝利を得ることがあったとしても、それは彼らが「歴史の流れに抗する必然の予言的確信」を持ちえたためなのである。

チャイルドがより大きな関心を見せ自らの作品に用いた物語の枠組みが、先住民と白人の衝突という歴史的・政治的側面ではなく、ニューイングランドの歴史の意味づけとその文化のあり様であることは明らかである。Eastburn と Sands がサブプロットとして用いた Yamoyden と Nora の愛の物語を、チャイルドはピューリタン社会の中の女性の物語に書き変え、また、Eastburn と Sands が多大な関心を示し Palfrey が糾弾した先住民の権利の是非の問題を考察の対象とはしない。それどころか、彼女は先住民問題を白人社会の揺籃期の不安材料のひとつとして取り扱っており、アメリカ大陸から消えていく先住民を Palfrey と同様に白人社会形成のひとつの過程として捉えている。紙面に限りもあるので、ふたつの点、即ち先住民男性と白人女性の結婚、そして、英国と米国の文化的相違の点から、チャイルドがいかに *Yamoyden* の持つ政治的・歴史的側面を、女性の、ひいてはアメリカの物語に変容させていったかについて見ていきたい。

(3)

先住民男性と白人女性の恋愛と結婚という観点から見ると、*Yamoyden* が *Hobomok* に与えたテーマ上の影響はほとんどないと言ってよい。次に挙げるのは *Yamoyden* の第三篇二十七～二十九スタンザからの引用で、*Hobomok* のエピソードとしてチャイルドが用いたところである。Nora と *Yamoyden* の関係は彼女の父 Fitzgerald を通して読者に伝えられる。

... an Indian sought
Ere long our newly rising cot:

It seemed the friendship which he bare
The white man's race had led him there,
With strong desire their love to learn,
And Christian usages discern. . . .
But better was she pleased, to tell
Of her own loved and pastoral vale,
Its sheltering hills, and banks of green,
Of childhood's gladsome pranks the scene.
Then rapt, his ear he would incline,
As if some seraph's voice divine
Brought tidings from those opal fields
Which Autumn's sun, descending, gilds.
I should have looked to see as soon
The uncaverned wolf, in frolics boon,
With bounding fawn unfeared agree,
As that between *them* love should be.
But I abhorred such converse vain,
And checked the Pagan's speech profane.
I chided and forbade. Alas!
Too late to save my child it was.
Perchance, too long alone she strayed,
In her young hours, within the shade
Of those blest scenes where life began,
Far from the busy haunts of man.
For sinful phantasy still loves
To people mountains, caves and groves;
By whispering leaves and murmuring rill,

The tempter speaks, when all is still,
 And phantoms in the brain will raise,
 That haunt the paths of after days. . . .
 I drove the Pagan forth too late,
 For they at stolen hours had met: —
 Haply, too sternly to my child
 I spoke; her nature was most mild,
 Her feelings warm, but never wild.
 I trod too rudely on the shoot
 Of that young passion's embryo root;
 Like the meek chamomile, it grew
 Luxuriant from the bruise anew.
 An English youth her suitor came;
 I hoped to quench the unholy flame
 The heathen lit, by sacred vows
 Of wedlock with a Christian spouse.
 It did but haste her final doom, —
 On one sad night she left her home;
 She parted, with the tawny chief,
 And left me lonely in my grief.
 Research was vain, though long pursued,
 I sought again my solitude. (*Yamoyden*, Canto III, stanza XXVII,
 ll. 9-14; stanza XXVIII, ll. 40-65; stanza XXIX, ll. 1-19)

山や洞窟や小森で子供時代のほとんどを過ごした彼女は、*Yamoyden* の語る西の自然の素晴らしい眺めや古戦場や森と広い原野を通る獵師の道の描写に魅了され、自然な形で二人の間には愛が芽生える。「異教徒が焚き

つけた罪深い炎」を必死に消そうとする Fitzgerald は英国人の求婚者が現れたことを喜ぶが、それは「娘の最後の運命を早めた」だけで、Nora と Yamoyden は駆け落ちしてしまうのである。

次の引用は Yamoyden が Metacom の戦いに加わるために小屋を出るときの Nora との会話の一部である。彼女の青白い美しい顔には「天空を通り過ぎるセラフの飛翔に、より純粋な光の跡をつけるような、あの柔らかい、彼女独特の輝き」があり、それが「神秘的な力」を彼の魂の上に振るい、「何も生えていない冬の地面」の上で、「しばしば明けの明星が彼女の東の朝霧の中から現れ」、「明るい希望の光」となって彼の目の前に現れたと彼は彼女に語る。

In rapt delight the chieftain gazed, —
Her pale, fair brow was upward raised;
In her blue eye devotion shone,
With that mild radiance, all its own,
Such as might mark, with purer light,
O'er heaven a passing seraph's flight.
“Nora, thou cam'st mid dreary strife,
To bless and cheer a wayward life; —
O! thou wast borne upon my sight,
In blessedness and beauty given,
Of all good tidings omen fair;
As floating thro' the azure air,
The Wakon bird descends from heaven,
Poised on his feet and equal wings,
And from his glittering train far flings,
Marking his pathway from above,

The rainbow hues of peace and love! (*Yamoyden*, Canto II, stanza IX, ll. 65-66)

ここにはキリスト教に改宗した先住民の姿が描かれているが、二人の愛は「突然の無上の喜び」を二人に与え、無邪気な眠りの中にある子供を見つめる彼らの目には「愛と歓喜」が入り混じりつつ燃えている (Canto II, stanza X)。キリスト教徒である彼がなぜキリスト教徒の白人と戦わなくてはならないのかと Nora が問い詰めると、*Yamoyden* は先祖が支配した広い森が圧政者に踏みにじられたことは彼女の「信仰の清水のすべてをもってしても人間の心から洗い去ることはできない」、白人に受けた「不正は死でもってしか償えない」と主張して、再び *Metacom* のもとに戻っていく (Canto II, stanzas XI-XIII)。

先ほども述べたように、チャイルドはエピグラフとして第三篇から三か所引用しており、彼女が *Hobomok* を書き始めた後に *Yamoyden* を読み、第三篇に目を通したことは明らかである。ところが、彼女は主人公 Mary と *Hobomok* の関係を *Yamoyden* と Nora の関係とは全く違う形で描いていく。Mary は父 Roger Conant 及び律法主義者たちが支配するピューリタン社会に人間性の否定を見て取り、これに反発する形で英国とその文化を理想化する。上記の *Yamoyden* からの二つの引用部分に関して、*Palfrey* は全く原作から引用しないばかりか、自分の言葉で語り直すこともしていない。*Yamoyden* が Nora と結婚し、彼がキリスト教徒となったこと、また、キリスト教徒でありながら *Metacom* に忠誠を誓っていることに簡単に(三行)言及しているだけである(470)。チャイルドも *Palfrey* と同様で、二人の関係には大きな意味を見出そうとはしていない。彼女が *Palfrey* の書評から譲り受けたものをその後も保持し続けたことは *Hobomok* のプロットから明らかである。*Yamoyden* という作品を読んだ

後も彼女の関心が Metacom や Yamoyden よりも、Metacom と敵対した Ahauton にあったことは間違いない。

Hobomok は、キリスト教と先住民の大義の間の衝突に苦しんだ Yamoyden の場合と大きく違い、明らかに白人社会の側に与し、先住民が起こす暴動の気配を Mary の父 Conant たちに伝える位置に立つ。Hobomok は白人に対して旗幟鮮明な対決姿勢を取る Corbitant と敵対し、後者の親戚の娘との結婚の話を後に反故にし、彼が計画する暴動を失敗に終わらせ、白人社会を救う役を担う人物なのである。母親を Mary に看病してもらい助けてもらったことを契機に Mary を尊敬し、一途に愛する Hobomok であるが、ところが彼女の目はピューリタン社会と対立する英国聖公会の Charles Brown にひたすら注がれる。

A woman's heart loves the flattery of devoted attention, let it come from what source it may. Perhaps Mary smiled too complacently on such offerings; perhaps she listened with too much interest, to descriptions of the Indian nations, glowing as they were in the brief, figurative language of nature. Be that as it may, love for Conant's daughter, love deep and intense, had sunk far into the bosom of the savage. In minds of a light and thoughtless cast, love spreads its thin, fibrous roots upon the surface, and withers when laid open to the scorching trials of life; but in souls of sterner mould, it takes a slower and deeper root. The untutored chief knew not the strange visitant which had usurped such empire in his heart; if he found himself gazing upon her face in silent eagerness, 'twas but adoration for so bright an emanation from the Good Spirit; if something within taught him to copy, with promptitude, all the kind attentions of

the white man, 'twas gratitude for the life of his mother which she had preserved. However, female penetration knew the plant, though thriving in so wild a soil; and female vanity sinfully indulged its growth. Sometimes a shuddering superstition would come over her, when she thought of his sudden appearance in the mystic circle, and she would sigh at the vast distance which separated her from her lover; but the probability of Brown's return, would speedily chase away such thoughts. (*Hobomok* 84-85)

彼女が Hobomok を選択するのは Charles が船の遭難で命を落としたという知らせを受けたとき、そして彼女を支えてきた母が病気のために亡くなったときであり、この二つの理由のためにピューリタン社会に生きる目標を完全に失った Mary は精神錯乱状態の中で Hobomok を受け入れる。

There was a chaos in Mary's mind; — a dim twilight, which had at first made all objects shadowy, and which was rapidly darkening into misery, almost insensible of its source. The sudden stroke which had dashed from her lips the long promised cup of joy, had almost hurled reason from his throne. What now had life to offer? If she went to England, those for whom she most wished to return, were dead. If she remained in America, what communion could she have with those around her? Even Hobomok, whose language was brief, figurative, and poetic, and whose nature was unwarped by the artifices of civilized life, was far preferable to them. She remembered the idolatry he had always paid her, and in the desolation of the moment, she felt as

if he was the only being in the wide world who was left to love her. With this, came the recollection of his appearance in the mystic circle. A broken and confused mass followed; in which a sense of sudden bereavement, deep and bitter reproaches against her father, and a blind belief in fatality were alone conspicuous. In the midst of this whirlwind of thoughts and passions, she turned suddenly towards the Indian, as she said,

“I will be your wife, Hobomok, if you love me.” (*Hobomok* 121)

第一章のプロットに限定すれば、Mary が夜に暗い森の中で描く“mystic circle” (13) は、Grasso が言うように「欧米の社会慣習の束縛から女性が抜け出すためには非白人男性の住む未知の世界に入る必要がある」、また「文明人たる白人男性の腕に保護を求める夢を捨てきれない」(86) 彼女の心を表していると解釈することもできるかもしれない。しかし、上記の引用では Hobomok は彼女にとってピューリタン社会と対峙する文化、つまり Charles の代替物でしかなく、ここには非白人対白人という人種的差異は存在しない。ここで重要なことは Mary が Hobomok を前にして「目を閉じ、相手を見捨て拒絶し」、そうすることで「相手を変容させて受け入れている」(Barthes 28) ことである。第一章で “mystic circle” に自ら足を踏み入れた Hobomok と第十七章でそれを許容する Mary という図式から読み取れるのは二人のそのような関係である。

この二人の関係はチャイルドによって不変のものとして提示される。結婚後先住民の生活に慣れ子供も生まれた Mary は次第に Hobomok を愛するようになるのだが、チャイルドは閉じさせた Mary の目を再び無理やり開けさせる。つまりこの物語は Charles の再登場なくして終わることはできないのである。森の中で Charles に遭遇した Hobomok は自らの意志で Mary との結婚を無効なものとし、森の中に消えていく。Hobomok が自

ら身を引いたことを Charles から聞いた Mary は自らの行動について次のように語る。

“My temptations were many,” said Mary, interrupting the silence. “I cannot tell you all now. But at home all was dark and comfortless; and when I heard you too were gone, my reason was obscured. Believe me I knew as little as I cared, whither I went, so as I could but escape the scenes wherewith you were connected; but to this hour, my love has never abated.”
(*Hobomok* 148)

Yamoyden と *Hobomok* は先住民男性と白人女性の間の子供の将来についても明らかに異なる描写を与えている。瀕死の傷を負った *Yamoyden* に向かって「あなたの霊は一人で天国に行くことはない。／春ののどかな花に抱かれて互いに愛し／青々とした夏の間だけ互いに誠実で／暗い冬の身の毛もよだつ時が来る前に別れてしまうような／私たちの愛はそんなものではなかった」(Canto IV, stanza XXIV, ll. 20-26) と言いつつ死んでいく *Nora* を前にして、彼女の父 *Fitzgerald* は二人の子供を育てていく決意を二人に告げる。

Fitzgerald, bending o'er them, brushed
Aside the tears that freely gushed.
“Farewell, misguided one!” he said, —
“Dim light along thy path was shed;
There may be mercy, even for thee!
Thy child is safe; may heaven to me
Be kind as I to him shall be!

May this thy parting hour be sweet;
Thy wounded conscience healed;
With unction of the Paraclete,
Thy soul's salvation sealed;
And may thy parted spirit meet
Thy Saviour's form revealed. (*Yamoyden*, Canto VI, stanza
XXV, ll. 15-21)

最期まで *Yamoyden* とともに生きた *Nora* の魂の救いが得られることを神に祈る *Fitzgerald* は、二人の子供を育てていく自分自身にも神の救いを求めている。

チャイルドは物語が大団円を迎えたところで *Hobomok* と *Mary* の子供の養育について全く対照的な説明を付け加えている。*Mary* の失踪の前に *Charles* との結婚を許すつもりでいた父 *Conant* は、娘の *Hobomok* との結婚は精神錯乱のためと捉えており、娘が *Charles* と結婚するという知らせを受けるとすぐさま娘を許すのである。チャイルドは次のような語りで物語を締めくくる。

Partly from consciousness of blame, and partly from a mixed feeling of compassion and affection, the little *Hobomok* was always a peculiar favorite with his grandfather. At his request, half the legacy of *Earl Rivers* was appropriated to his education. He was afterwards a distinguished graduate at *Cambridge*; and when he left that infant university, he departed to finish his studies in *England*. His father was seldom spoken of; and by degrees his Indian appellation was silently omitted. But the devoted, romantic love of *Hobomok* was never forgotten by its

object; and his faithful services to the “Yengees” are still remembered with gratitude; though the tender slip which he protected, has since become a mighty tree, and the nations of the earth seek refuge beneath its branches. (*Hobomok* 149-50)

Mary は森の中に自らの意思で姿を消した Hobomok がひたすら自分に捧げた愛と、白人への忠実な援助に対して感謝はしているが、彼が彼女の心に記したものはただそれだけである。Hobomok が失うものは Mary だけではない。彼の子供は白人社会の中で教育を受けることによって先住民としてのアイデンティティを喪失していく。Conant と Mary の両者の行動とチャイルドの語りは消えゆく先住民の運命と強大な国家となっていくピューリタン社会の発展を示唆している。

(4)

Yamoyden と *Hobomok* の違いについて、もう一つの側面、つまり二つの作品がアメリカ社会を描写するための手段として用いている英国とその文化への言及の観点から見てみよう。まずは *Yamoyden* であるが、*Yamoyden* には英米の比較は二か所ある。次の引用は先住民と対立するピューリタン集団の中の牧師が英国の横暴を批判する場面を描写している。

Such were the wrongs that cried to heaven —
What time shall see those wrongs forgiven!
O England! from thine earliest age,
Land of the warrior and the sage!
Eyrie of freedom, reared on rocks
That frown o'er ancient ocean's shocks!
Cradle of art! religion's fane,

Whose incense ne'er aspired in vain!
Temple of laws that shall not die,
When brass and marble crumbled lie!
Parent of bards whose harps rehearse
Immortal deeds in deathless verse!
O England! can thy pride forget
Thy soil with martyrs' blood is wet?
Bethink thee, — like the plagues which sleep
In earth's dark bosom buried deep,
As the poor savage deems, — that o'er
Thine head, the vials yet in store,
Vials of righteous wrath must pour! (*Yamoyden*, Canto III,
stanza X, ll. 1-19)

これは聖書を手に持ちその目は靈感に満ちたキリスト教徒の白髪の高僧が、苦役と苦悩の昔の情景について語る場面の言葉であり、「征服という流れ星の光のような誘惑も / 空想という夢のまばゆい鉦山も / また、熱狂的な冒険という遍歴愛も / この巡礼者の集団を彼らの父の昔のホームから / 労苦、死、危険に囲まれて / 荒海に揺さぶられて運んできたわけではなかった」と言いつつ、彼は「鉄のしゃくを振るう」(*Yamoyden*, Canto III, stanza IX, ll. 1-6; l. 15) 英国を責めるのだが、それでも英国が自由と芸術と宗教と法の聖堂であったという点は高く評価している。

もう一つ英米の対比が使われている個所がある。それは *Yamoyden* の結末場面での語り手の言葉である。

I would not wrong thy warrior shade, could I
Aught in my verse or make or mar thy fame;

As the light carol of a bird flown by,
Will pass the youthful strain that breathed thy name:
But in that land whence thy destroyers came,
A sacred bard thy champion shall be found;
He of the laureate wreath for thee shall claim
The hero's honours, to earth's farthest bound,
Where Albion's tongue is heard, or Albion's songs resound.
(*Yamoyden*, "Conclusion," ll. 37-45)

ここにはアメリカでなされた不当な悪が英国の手で明らかにされ、また、*Metacom* の最期が決して無駄ではなかったことを詠う者がアメリカではなく英国に現れるであろうという作者の期待が込められている。

ピューリタンの父と抗う *Mary* の物語 *Hobomok* には、ピューリタン社会の閉塞感と対照的な英国社会と文化の描写が枚挙にいとまがないほどに登場するが、紙面の関係上ひとつだけ例を挙げたい。

With all *Mary's* habitual sweetness of disposition, this course of conduct did serve to diminish her filial respect and affection. She had no sympathy with her father's religious scruples, for her heart very naturally bowed down before the same altar with the man she loved. None could form an idea of the depth and fervor of her affection, who had not, like her, left a bright and sunny path, to wander in the train of misery, gloom, and famine. During her stay at her grandfather's, she had become familiar with much that was beautiful in painting, and lovely in sculpture, as well as all that was elegant in the poetry of that early period; and their rich outline was deeply impressed upon her young

heart. For her mother's sake, she endured the mean and laborious offices which she was obliged to perform, but she lived only in the remembrance of that fairy spot in her existence. Alone as she was, without one spirit that came in contact with her own, she breathed only in the regions of fancy; and many an ideal object had she invested with its rainbow robe. When at length she found a being who understood her feelings, and who loved, as she had imagined love, her whole soul was rivetted. The harshness of her father tended to increase this, by rendering the stream of affection more undivided in its source. (46-47)

Mary はカルヴィン主義とは真つ向から対立する恋人 Charles の監督派教会の教義を信仰し、英国の祖父の屋敷で見た絵画や彫刻を好み、これらの空想の中に生きることでアメリカでの生活に耐えている。*Yamoyden* において英国は自由と芸術と宗教と法の聖堂として存在するが、*Hobomok* のピューリタン社会の中で英国に与えられた位置づけは、アメリカに欠如しているもの、即ち信教の自由や美や青春の象徴である。そればかりではない。英国とアメリカ植民地の対立は Mary、及び Charles と彼女の父 Conant の対立と衝突の象徴として機能し、やがてそれは両者の和解の中に飲み込まれ、アメリカの歴史が抱えた自己矛盾 (“self-deluded,” *Yamoyden*, 90) を暴露するという媒体としての役割を演じる場は与えられていない。

(5)

アメリカの叙事詩について論じた *American Epic* の中で、アメリカの作家たちは独立革命に勝利した新興国アメリカの栄光を称えるために、彼らの叙事詩のモデルをホメロスら古代ギリシア人の描く残酷な世界では

なく、ピューリタンたちの圧制との戦いの歴史の世界に求めたと McWilliams は述べている。「文化的な自己正当化」(93) を追求するアメリカの真摯な叙事詩において、アメリカ人が遭遇した先住民は Big Serpent, Magua, Mahtoree, Sanutee, Pontiac のグループと Yamoyden, Uncas, Hard Heart, Occonestoga のグループ (127) の二つに分けられた。前者は自らが受けた不正への怒りを白人に対して爆発させるが、後者のグループは戦士としての栄光や名誉は求めようとせず、その優しさと気品によって、先住民と白人の文化を結びつけると同時にそれを凌駕する世界の可能性という、「決して成就することのない期待」を読者に与えたというのである。Corbitant が前者に属するとすれば、Hobomok が後者のグループに属することは誰の目にも明らかである。Hobomok という作品は父権社会の中の女性という非常に興味深い視点から書かれた作品であるだけではない。Hobomok が McWilliams の言う「アメリカの栄光」を称えるアメリカの物語としてアメリカ文学に大きく寄与したことは確かである。しかしながら Yamoyden は McWilliams の言うところの後者グループには入らない。Yamoyden は二つの文化を結ぶ役割を与えられながらも先住民と白人の二つの世界の衝突のために歴史の闇に葬り去られていく。アメリカ作家たちが構築していく「真摯な」叙事詩の範疇からはみ出す形となった Yamoyden において、その主人公を Ahauton ではなく Yamoyden としたからこそ Eastburn と Sands は読者に歴史の場を提供できたと言える。

注

1. チャイルド自身 1846 年 Rufus Griswold に宛てた手紙の中で、「ニューイングランドの初期の歴史をフィクションのために使うことを雄弁に述べた」Palfrey の書評に触れているが、また「当時はアメリカの本はほと

んどなく、クーパーの作品もセジウィック夫人の本もまだ出ていなかった」とも書いている (*Selected Letters*, 232)。

2. 確かにチャイルドが先住民に関する物語を書き始めたのは 1828 年で、この年 “The Church in the Wilderness” や “The Lone Indian” などの先住民関係の短編を発表しているが、しかし彼女が先住民問題に関心を持ち始めたのはもっと早く、メイン州のノリッジウォックに移った姉の Mary Francis のもとので彼女が暮らし始めたとき、つまりチャイルドが 13 歳のときのことである。
3. Sayre は *Yamoyden* の「平庸な韻文、叙事詩的なわざとらしさ、過剰なロマン主義」のために理解しがたく、そのため現在では読まれていないが、注から判断する限り作者はアメリカンインディアンの民族誌学者を自認しており、「悲劇の持つ厳粛さ、民族歴史学的正確さ、そして主人公 *Yamoyden* への同情」は評価されていていと述べている (103)。ただ Sayre は結末部分で子供が「異人種間結婚の両親から解放」されて英国人に同化されていくのは *Hobomok* と同じであると解釈している (108)。これに対し、McWilliams は *Metacom* が *Yamoyden* の子供をさらうという愚かなサブプロットを作り出したこと、更には宗教上の幼児殺しが先住民の習慣でなかったことを知りつつ戦の神の生贄にしようとしたこと、この二点において Eastburn と Sands を批判している (134)。

引用文献

Barthes, Roland. “Myth Today.” *Semiotics*. Ed. Mark Gottdiener, Karin Boklund-Lagopoulou and Alexandros Ph. Lagopoulos. London: Sage Publications, 2003. 3-35.

- Child, Lydia Maria. *Hobomok and Other Writings on Indians*. New Brunswick: Rutgers University Press, 1992.
- . *Selected Letters, 1817-1880*. Ed. Milton Meltzer and Patricia G. Holland. Amherst: University of Massachusetts Press, 1982.
- Eastburn, James Wallis and Robert C. Sands. *Yamoyden: A Tale of the Wars of King Philip, in Six Cantos*. New York: Clayton and Kingsland, 1820.
- Gardner, Charles Kitchell. "Yamoyden: A Tale of the Wars of King Philip, in Six Cantos." *Literary and Scientific Repository, and Critical Review*. Vol. II. New York: Wiley and Halsted, 1821. 54-68.
- Grasso, Linda M. *The Artistry of Anger: Black and White Women's Literature in America, 1820-1860*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2002.
- Higginson, Thomas Wentworth. *Contemporaries*. Vol. 2. Charleston, S.C.: BiblioBazaar, LLC, 2008.
- July, Robert W. *The Essential New Yorker, Gulian Crommelin Verplanck*. Durham: Duke University Press, 1951.
- Karcher, Carolyn L. "Introduction." Karcher, ed. *Hobomok and Other Writings on Indians*. ix-xxxviii.
- McWilliams, John P., Jr. *The American Epic: Transforming a Genre, 1770-1860*. Cambridge: Cambridge UP, 1989.

Palfrey, John Gorham. "Yamoyden, a tale of the wars of king Philip, in six cantos." *North American Review*, vol.12 (April, 1821): 466-88.

Sayre, Gordon M. *The Indian Chief as Tragic Hero: Native Resistance and the Literatures of America, from Moctezuma to Tecumseh*. Chapel Hill: University of North Carolina P, 2005.

Sprague, William B. *Annals of the American Episcopal Pulpit: Or, Commemorative Notices of Distinguished Clergymen of the Episcopal Church in the United States*. New York: Robert Carter & Brothers. 1857.

Taft, Kendall B. *Minor-Knickerbockers: Representative Selections, with Introduction, Bibliography, and Notes*. New York: American Book Company, 1947.

Thompson, Ralph. *American Literary Annuals & Gift Book, 1825-1865*. 1936; rpt. n.p.: Thompson Press, 2007.